

今回のエルニーニョ現象の衰退について

報道参考資料

平成15年4月10日
気象庁 気候・海洋気象部

2002年春に発生した今回のエルニーニョ現象は、2002年末頃に成熟期を迎えた。その後今年に入って、太平洋赤道域の大気・海洋の状況は急速に平年の状態に戻りつつある。

- エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は、2002年11月の+1.5 をピークに減少し、2003年3月には+0.1 となった(図1)。
- 太平洋赤道域の海面水温は、2002年11月には中部から東部にかけて広い範囲で+1 以上の正偏差域が見られたが、2003年3月には中部で正偏差域が縮小するとともに東部では負偏差域が現れた(図2)。
- 太平洋赤道域の海洋表層水温は、2002年11月には東部で正偏差、西部で負偏差となり、東西のコントラストが明瞭であったが、2003年3月には、東部の正偏差域が小さくなり一部では負偏差域も見られた(図3)。
- 太平洋赤道域の対流活動の活発な積乱雲の多い場所は、2002年12月には通常より東で見られ、インドネシア付近では通常より少なくなっていたが、2003年3月には日付変更線付近を除いて平年の状態に近づいた(図4)。

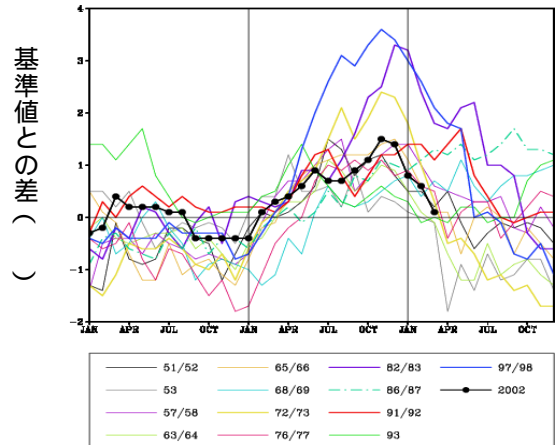


図1：過去13例のエルニーニョ現象と今回についての、監視海域の海面水温の基準値との差の時間変化の比較印が今回。数字はエルニーニョ発生年(-1900)

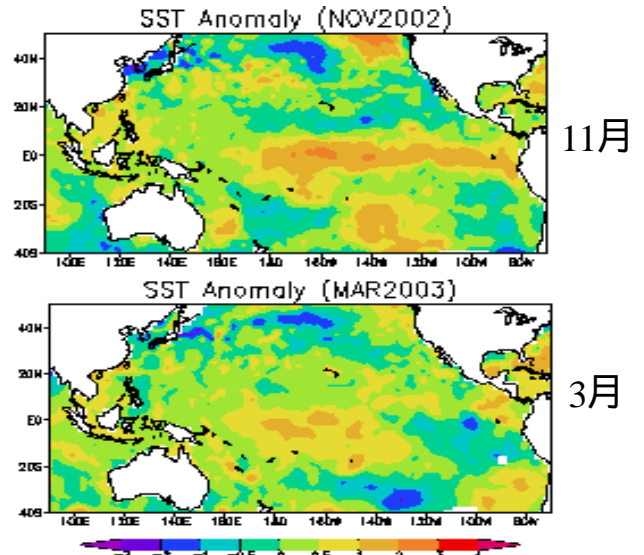


図2：月平均海面水温偏差 (2002年11月、2003年3月)

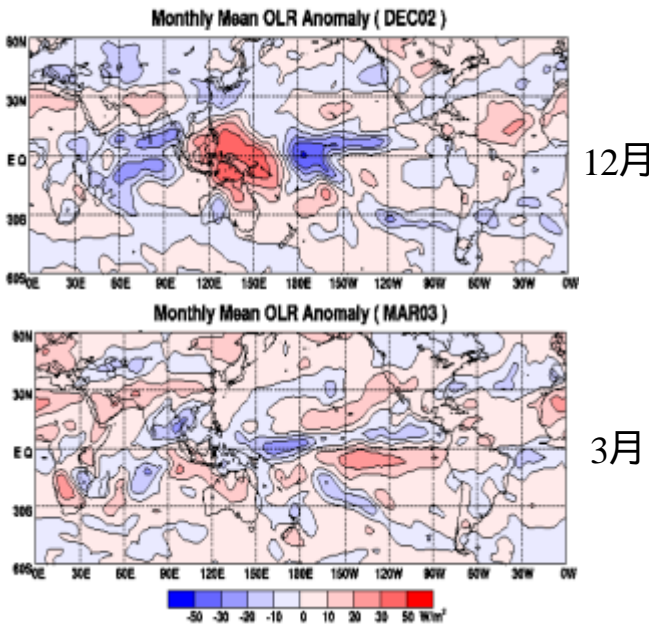


図4：外向き長波放射量(OLR)偏差分布。データは米国NOAAの提供による。負偏差(青)の場所では通常より雲が増え、正偏差(赤)の場所では通常より減っている。

(上：2002年12月、下：2003年3月)

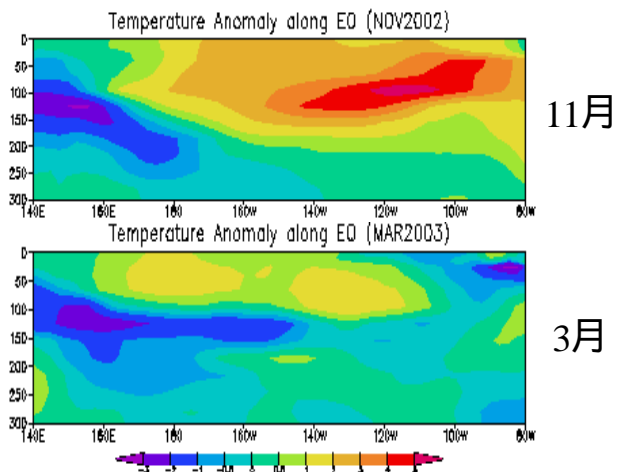


図3：太平洋の赤道に沿った水温偏差の深度-経度断面(上：2002年11月、下：2003年3月)